

# 子どもの事故発生に影響を与える要因の検討

—親の認識と子どもの特性の観点から—

河岸 あゆみ

子どもの死の主たる原因は不慮の事故である。子どもの事故防止については、安全対策と事故との関係や、子どもの特性と事故との関係などの研究が数多くなされている。しかし、親と子どもの組み合わせと子どもの事故の関係について検討したものは見受けられない。そこで本研究では、インタビュー調査と質問紙調査によって子どもの事故発生に影響を与える要因について検討し、事故の実態改善のために有益な情報を提供することを目的として行った。

まずインタビュー調査では、育児中の母親 20 名に直接ヒアリングをし、安全対策や事故・ヒヤリハット経験について実態を調査することと、質問紙に取り入れる質問項目を検討することを目的とした。手法としては、育児支援施設に通う母親を対象にインタビュー調査を実施し、事故・ヒヤリハット経験、家庭内の安全対策、子どもの特性などについて尋ねた。対象児の平均月齢は 21.25 カ月だった ( $SD=6.47$ )。本研究では、安全面における育児態度と直結していると考えられる、子どもの怪我に対する抵抗感に着目した。子どもの怪我に対する抵抗感が薄れていく変化の過程には、親が「子どもの学習能力を認識」することの影響が少なからずあることが示唆された。

質問紙調査の目的は、インタビュー調査で得られた知見をもとに作成した質問紙によって調査を行い、子どもの事故発生に影響を与える要因を検討することであった。インタビュー調査で着目した子どもの怪我に対する抵抗感を尋ねる項目を含む質問紙を作成し、423 名の幼稚園児の親から回答を得た。調査対象となった子どもの平均年齢は 4.48 歳 ( $SD=1.03$ ) だった。分析は、親の認識 (育児態度・安全対策)、子どもの特性 (子どもの潜在的危険傾向特性・性別・年齢・出生順位)、親子の組み合わせの観点から行った。その結果、親の認識においては育児態度 (現実容認型>放任型・管理型)、子どもの特性においては子どもの潜在的危険傾向特性 (高群>低群)、性別 (男児>女児)、年齢 (低年齢>高年齢) が事故-ヒヤリ経験に影響を与えることが示された。ここから、現実容認型態度は、子どもの行動を予測できないため行動を制限するものの徹底的に制限できず、その結果子どもがリスクにさらされる機会が増え、事故-ヒヤリ経験が多くなると考えられる。また親子の観点から検討すると、子どもの潜在的危険傾向特性に関わらず、リスクに肯定的な親の子どもはリスクに否定的な親の子どもよりも事故-ヒヤリ経験が多い傾向にあった。ここから、育児態度はしつけや教育として普段の子育ての場面に現れやすく、子どもへの影響が大きいことが示唆された。ただし、男児においては衝動性因子も大きく影響していた。衝動性因子が高い男児であれば、子どもの行動を管理することは困難だと考えられるため、大げがをしないよう普段から安全教育をしていくことが重要であるといえる。

また、育児態度は子どもの属性によって決まるものではなく、親によって異なる態度であることが示された。しかし、子どもの事故を防止するには、子どもの成長や特性に合わせて安全管理と安全教育のバランスを変えていく必要がある。そのため、危険を自覚しているにもかかわらず現状を容認している親に対して、物質的な安全対策に固執するのではなく、子どもが危険回避能力を身につけられるように安全教育を行うよう働きかければ、事故防止につながると考えられる。

(応用行動学・ボランティア行動学)